

観光フォーラム

国際学会レポート：

The 5th Asian Forum the Next Generation of the Social Sciences of Sport

International Conference Report:

The 5th Asian Forum the Next Generation of the Social Sciences of Sport

神野 あきら¹、佐竹 真由¹、伊藤 愛¹、砂田 悠花¹、伊藤 央二²

Akira Jinno, Mayu Satake, Mana Ito, Haruka Sunada, Eiji Ito

1 和歌山大学観光学部生

2 和歌山大学観光学部

I. フォーラム概要

The 5th Asian Forum the Next Generation of the Social Sciences of Sport (通称 Asian Forum) が2016年2月16日から18日の3日間にわたり韓国の本浦大学で開催された。2016年度大会のテーマは「観光、文化、産業としてのスポーツの役割と挑戦 (Roles and Challenges of Sport as Tourism, Culture & Industry)」であり、主催国である韓国をはじめとするアジアの国々から多くの研究者・学生が参加した。また、今大会にはフォーラム初のアジア圏外からのゲストとして、カナダから Dr. Tom Hinch (アルバータ大学) が参加した。Asian Forum は2012年から開催されており、第1回は韓国のカトリック関東大学で開催され、その後第2回を国立淡路青少年交流の家、第3回を再び韓国のカトリック関東大学、第4回を北海道のながめ温泉を開催地とし、日本と韓国において交互にフォーラムを運営している。このフォーラムは、次世代を担う若手研究者を育てることを目的の1つとしており、今大会にも多くの若手研究者や学生が参加し、観光、文化、産業という側面からスポーツに関わる研究発表が行われた。

今回のフォーラムのプログラムとして、基調講演、口頭発表、ポスター発表の3つのセッションが行われた。基調講演では、カナダからのゲストの Dr. Tom Hinch がスポーツツーリズムに関する展望と課題について、韓国スポーツ社会学会会長の Dr. Jinkyung Park (カトリック関東大学) が韓国の伝統武芸のテッキョンの発展過程について、そして最後に日本の生涯スポーツ学会会長の山口泰雄教授 (神戸大学) がパラリンピックの拠点施設の国際比較について発表を行った。口頭発表のセッションもメイン会場で Sport Culture in Asia、Sport Tourism & Sport Industry のテーマのもと11題目の研究発表が行われた。表1に基調講演と口頭発表の題目を示している。

ポスター発表のセッションでは、Sport Culture、Sport Tourism、Sport Industry の3つのテーマのもと、24題目の研究発表が2つの会場に分かれ同時に行われた。先述したように若手研究者を育てることが本フォーラムの目的ということもあり、口頭発表のセッションでは若手研究者が、ポスター発表のセッションでは大学院生や学部生の研究発表が多く行われた。また、発表前日のレセプションでは、韓国の伝統的な踊りや歌が披露され、盛大な歓迎を受けた。日本にもおもてなしの文化は存在するが、今回の韓国の学会でのおもてなしは、韓国伝統芸能の披露だけではなく、主要産業であるIT産業関連の景品が参加者の半数近くに渡るよう準備されていた。日本の厳かな雰囲気では始まるレセプションとは異なる韓国ならではのおもてなし文化を肌で感じる事が出来た。

II. 研究発表

著者らは、ポスター発表のセッション Sport Culture において「The Intentions of Volunteering at the Tokyo 2020 Olympic and Paralympic Games and Past Volunteer Experiences: The Roles of Different Types of Volunteer Activities」といったタイトルで研究発表を行い、2016 Best Student Paper Awardを受賞することができた。本研究は、笹川スポーツ財団スポーツライフ・データ2014をもとに、地域のスポーツクラブやスポーツイベントでのボランティア経験と東京2020オリンピック・パラリンピックでのボランティア参加希望との関連性について明らかにしたものである。本研究の結果から、これまでに経験したボランティアの内容によって東京2020オリンピック・パラリンピックでのボランティア参加希望意図に差が認められることが明らかになった。具体的には、地域イベントの会場準備・撤退といったボランティア経

験のみ、オリンピックおよびパラリンピックでのボランティア参加希望意図に対しポジティブな関連が認められた。本結果は、イベント中や競技中の前後に行うため拘束性が低く、無償での活動に見合った活動内容であることや、他のボランティアとのコミュニケーションが取りやすく、参加者同士の出会いも期待できるためではないかと考えられる（山口, 2004）。また、クラブチームでのコーチ・審判、会場設営といったボランティア経験はオリンピックおよびパラリンピックの参加希望意図に、送迎といったボランティア経験はオリンピックのみの参加希望意図にポジティブに関連していた。前者はオリンピックおよびパラリンピックどちらにおいても過去の経験を踏まえ取り組める内容であり、自分たちも気軽に行えるボランティア活動として想像しやすいことから参加希望につながったと推察される（武隈, 1997）。後者に関しては、パラリンピックでの送迎は障がいを持つ選手と直接関わるため、特別な知識が必要になることから、参加意図に繋がらなかったと考察することができる（大山・増田・安藤, 2011; 谷・中・山下・清田, 2003）。2020年の東京オリンピック・パラリンピックだけではなく、2019年のラグビーワールドカップや2021年の関西ワールドマスターズゲームズの成功に向けてもボランティアは必要不可欠な構成要素である。今後、スポーツイベントにおけるボランティア募集や保持のためのマーケティング戦略に関する実証研究がさらに求められる（山口・野川・山口, 2010）。

今回のセッション全体を通して参加人数の大半を占めていた日本と韓国との発表スタイルに相違点があることが窺えた。口頭発表のセッションにおいて、日本の研究者の発表内容は、仮説に基づき調査・データ分析を行うといった実証研究が多かった。これは以前参加した国内の学会（生涯スポーツ学会）と同様の傾向であった。これに対し、韓国の研究者の発表は特定のスポーツの歴史や、実務経験等により得られた知見に関しての記述的な研究発表が多く見られた。同じ研究領域であるにもかかわらず国によって研究の手法やテーマのトレンドに相違があることが窺えた。今回の Asian Forum を通じてこのような日本と韓国の違いを知ることができ、今後はアジアだけでなく他の国々の研究者の発表を聞き、国ごと地域ごとの類似・相違点について深く探求していきたい。

Ⅲ. 韓国の観光施設について

今回のフォーラムに参加するにあたり、関西国際空港から仁川国際空港、韓国高速鉄道の龍山駅を経由してフォーラム開催地であった木浦大学の最寄りの木浦駅に向かった。仁川国際空港は東アジア地域のハブ空港ということもあり、多くの渡航客で賑わい、空港内は韓国語、英語、中国語、日本語の言語標識であふれていた。仁川国際空港ではもちろん龍山駅においても、スタッフとは基本的に英語での意思疎通が可能であり、あまり不自由することなく施設を利用することができた。逆に、韓国高速鉄道の湖南高速線最南端の駅であ

る木浦駅では、都市圏から離れているということもあり、切符購入の際に日本語はもちろん英語も通じなかった。海外で母国語の標識があることや、言葉が通じるということは観光客に安心をもたらす重要な要素であり、改めて外国人訪問客に対する異国での母国語または英語提供の必要性を実感した。また、印象に残っているのは祈祷室の存在である。近年は韓国の鉄道や百貨店などでもこうした設備が設けられているようだが、日本国内で実際に目にする機会はあまり無いように思われる。インバウンド観光客が増加する日本においても、このような施設の拡充が求められるだろう。

今回のフォーラムプログラムの目玉の1つは、韓国インターナショナル・サーキット（霊岩サーキット）の見学であった。サーキット場の担当者から直接案内をしてもらうだけではなく、参加者の中から抽選で数名がセーフティーカーの助手席に乗り、時速約200キロでサーキットを周回する体験ができた。韓国唯一の国際公認一等級サーキット場である本サーキットでは、2010年から2013年までF1韓国グランプリが開催された。F1開催終了後の現在は、韓国自動車会社のテストコースや、複合モータースポーツ施設（自動車オフロードレース場等）として利用され、黒字で運営されている。使用頻度の少なくなったスポーツ施設を別の用途として有効活用し、なおかつそれが成功しているというマネジメント手法は、2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて会場の新設や再建が予定されている日本においても参考になる事例である。加えて、施設内にはミュージアムも併設され、スポーツミュージアムなどのスポーツ関連アトラクションへの訪問を目的とする郷愁型スポーツツーリズム（Hinch & Higham, 2011）の目的地としても活用されていた。実際に筆者らもミュージアムでレース動画の鑑賞やサーキット場内の見学を通し、いちスポーツツーリストとして有意義な時間を過ごすことができた。アクティブ型とイベント型スポーツツーリズムに比べ、郷愁型スポーツツーリズムの知見が国内外で限られていることから（Hinch, 2016; Hinch, Higham, & Sant, 2014）、今後は郷愁型スポーツツーリズムの普及に向けての実践的な研究が求められるだろう。

Ⅳ. まとめ

今回の Asian Forum の参加を通し、多種多様かつ興味深い研究発表に触れることができた。また、韓国インターナショナル・サーキット訪問では、今回のテーマにもあるように観光・産業としてのスポーツの役割を学ぶことができた。興味深いことに、このサーキットを中心とし、サーキット周辺地域を観光とスポーツを融合させた大規模な都市に発展させる計画が発表されている。今後、本スポーツ施設と周辺地域がスポーツシティゾーンとしてどのように変化していくのか動向を見守りたい。スポーツ施設と観光施設（宿泊、ショッピング、エンターテインメント等）を統合して開発されるエリアのスポーツシティゾーンは、世界的に見てトレンドになりつつあり、観光客の利便性を高め

るだけではなく騒音や混雑といったスポーツイベントがもたらすネガティブな影響を最小化する役割が期待されている (Hinch & Higham, 2011)。韓国におけるスポーツシティゾーンの開発は、日本にとって良いお手本となる可能性があるだろう。特に、東京オリンピック・パラリンピックをはじめとした世界規模のスポーツイベントを迎える日本にとって、スポーツと観光の関連性をどのように生かしていくべきなのかを改めて考えさせられた学会参加となった。次回の The 6th Asian Forum the Next Generation of the Social Sciences of Sport は「The State and Future of Sport Events and Tourism in Asia (アジアにおけるスポーツイベントとツーリズムにおける現状と展望)」をテーマに 2017 年 8 月 21 日から 23 日にかけて、和歌山大学にて開催予定である。

引用文献

- Hinch, T. (2016, September). Comprehensive review of sport tourism in Japan: 1990 to present – preliminary findings. Paper presented at Animating Places: Making Destinations Come Alive through Research, Travel and Tourism Research Association (TTRA) Canada Chapter Conference, Edmonton, Alberta.
- Hinch, T., & Higham, J. (2011). *Sport Tourism Development* (2nd ed.). Channel View Publications.
- Hinch, T., Higham, J., & Sant, S. L. (2014). Taking stock of sport tourism research. In Lew, A. A., Hall, C. M., & Williams, A. M. (eds.) *The Wiley Blackwell Companion to Tourism* (pp. 413-424). John Wiley & Sons.
- 大山祐太・増田貴人・安藤房治 (2011). 知的障害者のスポーツ活動における大学生ボランティアに対する保護者の意識. 弘前大学教育学部紀要, 106, 23-30.
- 武隈晃 (1997). 「スポーツボランティア」概念の周辺. 鹿児島大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編, 48, 57-70.
- 谷幸子・中比呂志・山下秋二・清田美絵 (2003). 障害者スポーツボランティアの類型化に関する研究: 活動期待の視点から. 体育・スポーツ経営学研究, 18 (1), 1-12.
- 山口志郎・野川春夫・山口泰雄 (2010). 総合型地域スポーツクラブにおけるボランティアマネジメントに関する研究: 設立形態が異なる 3 クラブに着目して. 体育・スポーツ科学, 19, 33-41.
- 山口泰雄 (2004). スポーツ・ボランティアとまちづくり. 山口泰雄編, スポーツ・ボランティアへの招待: 新しいスポーツ文化の可能性 (pp. 17-34). 世界思想社.

表 1 フォーラムの口頭発表プログラム

セッション 1: Keynote Lecture (基調講演)
The industry and culture of sport tourism: The roles and challenges for researchers (Tom Hinch, University of Alberta)
The heritagization and institutionalization of an intangible cultural heritage: Takkyeon, a traditional Korean martial art (Jinkyung Park, Catholic Kwandong University)
A comparative cross-national study for training and research centers for Paralympics (Yasuo Yamaguchi, Kobe University)

セッション 2: Sport Culture in Asia (アジアのスポーツ文化)

Cultural commonalities in constraints to leisure-time physical activity between Japanese and Euro-Canadians (Eiji Ito, Wakayama University)

International etiquette for sport diplomacy (Ohsang Kwon, Catholic Kwandong University)

Conflicts and meditation in football: A historical study of south Korean football in East Asian context (Sangyeol Bang, Hanyang University)

A study of high school and junior high school sports club activities in Japan (Youngkyung Park, Osaka University of Economics and Law)

A study on developing and implementing education programs for the national mountaineering school (Misuk Park, Mokpo National University)

Present condition of Korea sport talented development projects and analysis of problems and projects (Haichan Jo, Seoul National University)

セッション 3: Sport Tourism & Sport Industry (スポーツツーリズムとスポーツ産業)

Destination and event personality: Comparisons between participants who live in Hyogo and participants from other prefectures at the Ako city marathon (Shiro Yamaguchi, University of Marketing and Distribution Sciences)

The effect of tour program on the physical activity and self-efficacy in patients with joint arthroplasty (Hitoshi Sakimori, Anshin Hospital)

A study on the selection factors of "sports training camp" in Hokkaido: Focusing on the top sports teams (Nobuhiro Ishizawa, Hokkaido University of Education)

The current status and development of local sport industry (Kyoungyun Kim, Mokpo National University)

The impact of outdoor shop salesman's mountaineering expert on customer contact and sales outcome (Jongmin Won, Mokpo National University)